

ソ連の抑留生活

千葉県 宮崎 定雄

二十年十月二十二日、大泊港を出港、東京ダモイの声にだまされて、十月二十五日ポルトワニノ（ソフガワニ軍港東方二十キロ位）に上陸、貨車にて八十キロぐらい北上、三日後ルジヨウに到着、年末まで主として保線作業に従事する。

二十一年一月一日、またもダモイの話にて、貨車で南下。ポルトワニノ附近にて、線路の路盤作業。食糧不足と重労働。寒さのため、体力消耗。三月始めには、歩行困難（道路上の十センチ位の丸太や石を踏み起こすのがやっと）になる。このごろは同じバラックの補充兵、老年者は、朝方には死亡する者続出（二か月間に推定二十人）。

作業場の往復の途中、雀、鼠、きねずみ等の死体（寒さのためか）を見つけたい食べる生活であった。毎月

一回の健康診断（カテグリ検査）は、ソ連のドクトル（ほとんどが女医）が、我々を裸にして、四つばいにして、尻の肉をつかむ、筋肉のつかめるもの一級（重労働）、筋肉のややつかめるもの二級（普通労働）、皮のみのもの三級（軽労働）、皮と骨と一緒のもの四級（休養者）。

四月下旬の健康診断で、私は四級ジストロフィヤー（栄養失調）と診断され、五月一日、トラック便にて四十キロ位北上、チブナレン（通称オッペアジン）に收容された。この收容所は全員休養患者で、作業なく、砂糖、脂肪、肉の量を多くし、パン、穀物は若干少ない食事であった。衰弱した体は、寝台にあがるのがやっと、食堂に食事をもらいにいくのが大仕事であった。すわると、尾てい骨が痛く、尻を浮かして食べる状態であった。夜寝るとき、あおむきでは尾てい骨が痛く、横向きでは大腿骨が痛く、うつむせで、うつうつうつとして過ごした。半月ほどして、始めて側向で寝ることが出来た。一と月ほどしてかなり回復して、散歩、燃料の小さな枯枝を拾ってこれるようになった。六月下旬の検査で

三級に回復、七月上旬、三十キロくらい北上、トムニ収容所についた。九月上旬、三級者十五人、ダモイ要員になり、十五日、名前発表、老年者より年齢順にて十三人で打切り、私とほか一人は残された。

九月下旬検査で二級になり、測量の助手の補助者選ばれた。耕地測量及び橋梁、小さな木造の測量、私の仕事は測量器械及び材料の運搬、箱尺、ポール持ち、巻尺の一端押え、杭打等軽作業であった。木の実、草の実、蛙、川に浮いた魚等、見つけ次第食べた。体力も普通に近く回復した。

二十二年一月上旬南下、ソフガワニ軍港附近にて、飛行場滑走路の拡張作業に従事。この間七月上旬より二十日間位道路作業、午後の作業中、マムシを見つけた。エンピで殺し、三つ裂きにして私にくれた。袋に入れ、夕食取り出したら、まだ肉が屈伸していた。生のまま夕食の時、朝食の時食べた。非常においしく、ヒラメの刺身を油こくした味だった。一昼夜以上気分爽快であった。

十一月頃より体の調子が悪く、衰弱甚しく、下痢気味

で、夜から朝にかけて便所がよい。十回から十五回、便も小水も少量で、眠る暇もない状態であった。十一月下旬、健康診断で入院予定となり、病院いきの車待ち、作業及び雑用免除、ホーキより重いもの持たなくてもよい（医師の指示）生活であった。

一月中旬、港より二十五キロくらい北上、マンガクトウ（オーペーカロナー）に転出。二回目の休養生活も、前回の経験で安心した生活であった。二月には燃料の薪取りも参加、急速に体力が回復した。

三月中旬ダモイと収容所全員貨車にて、ポートワニノより四百三十六キロ北上、凍結したアムール河をわたる。氷がうすくなったため、貨車一両づつ切り離し、折返し運転にてコムソモリスク到着。すぐ西南に南下。ハバロフスクの西よりシベリア本線に入り、西上する。三月末イズベストコーワヤに到着。支線（バーム鉄道連絡線）のテルマ間、鉄道関連作業に従事する。貨車より河に土砂却し、貨車の石炭却し、不定期で終るまで続行、六十屯貨車の石炭却し作業で、当日の作業終了後、夕食後呼出され、翌日午後四時迄（約二十時間）ぶっ通し作

業もあつた。

九月一日テイルマにて、全員ダモイの話あり。名前順に整列五百人くらいにて、私ほか五人を残し、営門を閉じ出発した。翌日五百人くらいの団体が到着した。

二十二年春頃よりきびしくなつた民主運動のつるしあげ（将校摘出）。私も一般大衆として、後方にて参加が、今回自分にふりかかった。夕食点呼後、残留六人に対して、前職者（将校憲兵、警察官等）の摘出である。正面壇上に立たせられ、五百人の批判会である。批判と云うより罵声、怒声の繰り返しで、不動の姿勢での対応は、なすすべなしで、終るまで時とのたたかいである。

翌日K、翌々日MS、五日後に警察官、七日後E他の収容所に転出。私一人容疑で終つた。この一週間いきすぎた民生運動に夢遊病者のようになり、前途不要、希望なし、やけくその気持ですごした。

九月十日頃より一人の孤独な勤務、馬方（始めての馬扱）。乾草刈り及び運搬、馬の放牧監視、食事運搬、便所運搬、短期間、踏切番等、建築官舎の材料監視（夜六時より朝八時）。一月、二月には、屋外の全般監視あり、

零下三十度から四十五度ぐらいの日が多く、遮蔽物を見つけない、薪の採暖で動きつづけ（凍傷凍死の警戒）、時間を過ごすのに苦勞した。五月頃より皆と一緒の一般作業になった。

二十四年十月十三日、突然ダモイ命令、全員貨車にて出発。沿線日本人の姿なく、朝鮮人の収容所とかわり、作業する姿あり。十月十八日ナホトカ到着。十月二十二日夕、名優丸に乗船出港。十月二十五日舞鶴上陸。十月二十九日舞鶴乗車。十月三十一日夜八時故郷夕張着。

踊らされた青春

福岡県 尾花保衛

「聖戦!! 誰が名づけたのか? 君のため、国のためと、吾が青春は大陸の荒野に樹氷花咲き空気が凍る、ソ連国境へと勇躍出征した。」

腰には飯盆をさげ、手には銃をとり、欺慢におどらされ、人間と人間の殺し合いに悔いても悔やみきれない過